

学校教育目標	夢と志をもち、未来を切り拓く子どもの育成	経営理念	学校内外の教育環境を最大限に活用し、次世代を担う人づくりを行うとともに、地域とともに発展する学校を創る。
--------	----------------------	------	--

評価計画							自己評価				学校関係者評価		改善方策	
項目	重点	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目	目標値	達成値		達成度	評価	結果と課題の分析	評価	コメント	改善方策
							10月	3月						
確かな学力の向上	1	自ら学ぶ子どもの育成	主体的に取り組む児童の育成	主体性の育成に係る実践研究	・児童アンケート「授業に生かすために自主学習をしている。」	肯定的評価: 85%以上	肯定的評価 83.1%	肯定的評価 85.3%	100.0%	3	・児童アンケートで肯定的評価は、低学年が82.8%、高学年が87.2%で、全体では85.3%であった。低学年は、また、自主学習の仕方を知っている段階なので引き続き、取組を継続していく必要がある。高学年は、その点においていけるよう自己調整の力を身に付けていく必要がある。	A	参考になる自主学習の進め方を家庭に知らせるとともに、自主学習の状況について保護者のコメントを求めたことは有効な取組である。どのような自主学習を進めるのが望ましいのかについては保護者を含めた関係者で共有する必要がある。	【自主学習の意識向上を図る取組の強化】 前・後期1回ずつの自学チャレンジ(強化月間)月を設定する。 ・低学年…自主学習のやり方について指導の徹底。 ・高学年…日常的な自主学習時間の確保。 ・保護者啓発(自学チャレンジ後のコメント依頼) 【授業改善に向けた取組の強化】 ・子どもに任せる場面を設定するとともに、自己決定の場を増やす。 ・単元のゴールで身に付けた力や学習活動を、児童と共に設定する習慣化を図る。(単元を通して身に付けた力の共有)
					・教職員アンケート「授業において児童が主体的に活動するための工夫をしている。」	肯定的評価: 85%以上	肯定的評価 95.2%	肯定的評価 100%	117.6%	4	・授業の導入から、自分が興味工夫を引き出すものを準備したり、学習の中で方法を自己決定させる場面を意図的設定したりして、主体的に活動するための工夫を行った。若手教員も工夫を意識して行うよう努めた。	A	校内研修のテーマに「児童の「主体性」と「対話的な活動の工夫」「振り返りの充実」を位置付けたことにより、授業改善のポイントがどの教員にも捉えられている。保護者アンケートからも授業への満足度の高さが見え、望ましい方向で授業改善が進められていると考える。	
			基礎学力の定着	個別プリント・タブレットドリル学習の推進	・業者テスト国語(知識・理解) ・業者テスト算数(知識・理解)	80点以上の児童 85%	国語 93% 算数 94%	国語 93% 算数 95%	国語 109.4% 算数 111.8%	4	・学年部で、継続して朝の時間やドリルタイムなどを活用し、基礎学力の定着を図った。また、タブレットドリルを活用し、隙間の時間を使って個別に最適な学習を行うことで、児童の意欲や知識・技能の力を高めることができた。	A	児童の実態把握に努めるとともに、ICT機器やソフトの有効活用により基礎的な学力の定着が図られていると評価できる。今後は、学力の二極化への課題意識をもち、個に応じた対応を進める必要がある。	
豊かな心の育成	2	思いやりのある子どもの育成	あいさつの定着	児童会、PTA、地域との連携・協力	・児童アンケート(児童自らが設定した「あいさつ目標」の達成率)	肯定的評価: 85%以上	肯定的評価 90.4%	肯定的評価 91%	107.0%	4	・「こまめにあいさつの自己目標を設定することで、自己のあいさつの状況を振り返り、自分の現状に合った目標を設定することができ、肯定的な評価につながった。」「あいさつ委員会による「気持ちのいいあいさつ」を考えさせる発表を通して、あいさつの在り方を全校児童で考えた。」	B	児童の自己評価が高まることは望ましい事だが、実際には課題が感じられる。保護者・地域住民に対して、安心して挨拶できるようにするために、大人からの積極的な働きかけが必要である。	【家庭生活への働きかけ】 ・不登校傾向にある児童について情報共有や対応の仕方について職員で協議し、家庭への働きかけを検討する「不登校対応会議」の機能化 ・発達に特性が見られる児童に関わり、保護者を医療機関や行政機関へ繋げる取組の継続。 ・家庭環境に配慮した、家庭支援策の検討・実施。 ・生活基盤を整えることを目的とした保護者啓発の充実(各種たより・講演会 等) 【子どもの居場所づくり】 ・SSRの奨励及び他教室等活用による、適応が難しい児童支援の強化。 【関係諸機関との連携】 ・児童実態に応じた行政機関、医療機関、福祉施設、SC、SSW等との連携を強化
					・保護者アンケート「自分のお子様は家庭でよくあいさつをする。」	肯定的評価: 80%以上	肯定的評価 67.5%		67.8%	2	・児童が立てたあいさつの自己目標を、保護者と共有する機会を作ったり、あいさつ運動を実施し、保護者へ参加を呼び掛け、児童と一緒にあいさつ運動を行う機会を設定することで、あいさつに向けた家庭内での意識がやや高まったと考える。 しかし、児童全体のあいさつを問う項目での肯定的評価は、伸び悩んでいることを踏まえると、より家庭を巻き込んだ取り組みが必要だと考える。	B	ゲームや動画視聴の時間が増えることにより、家庭において挨拶を含め会話が少なくなっている傾向はないか検討を進めたい。社会生活を営む上で、挨拶が重要な点であることから保護者と共通認識し、目標を共有して取組を進める必要がある。	
			支持的風土の醸成	・異年齢集団活動の推進 ・児童会活動の充実	・児童アンケート「ほかの学年の人と協力して活動するのは楽しい」 ・「学校や学級全体のために役に立つことができた」	肯定的評価: 90%以上	肯定的評価 91.3%	肯定的評価 91%	101.1%	3	・6年生主催の縦割り活動(龍王祭り)を通して、異学年集団の絆を深めることができた。 ・縦割り班での掃除を通して協力し合う関係が高まり、スリッパの掃除ができるようになるにつれて、肯定的な評価が増えた。 ・児童会活動にかかわっては、高学年の方が肯定的な評価がやや高い。委員会活動などを通して学校全体にかかわっていると自覚している部分が大きく、活動したことに対する自己有用感が低学年と比べて高いためであると考える。	B	高学年児童にとって、掃除をはじめとした縦割り班活動は、リーダーシップを発揮し、自己有用感を高める上で有益な活動になっている。反面、低・中・高学年児童によって異学年集団での活動の自主性が発揮されているのかについては疑問が残る。大規模校において、縦割り班編成は大きな労力を要するため、その費用対効果を高める意識は重要である。	
健やかな身体力の育成	3	自ら安全や体力向上を意識して生活できる子どもの育成	食育の充実	自己目標を意識した食育指導の充実	・残食率	・4%台	6.4%	6.78%	58.9%	1	・3回目の完全食キャンペーンでは、事前に保護者に手紙を配付し、目標の設定や振り返りを保護者とともに進めるようにした。	B	給食指導の在り方も変化した。給食を残さず食べることに強く指導できない状況がある。反面、給食指導を通して食育の充実、健康を維持する上で大変重要な営みである。学校だけでなく家庭でもより良い食生活について考える取組を、粘り強く行っていくことが重要である。そのための連携が必要である。	【食育の充実】 ・完全食キャンペーンの実施及び保護者啓発活動強化。 ・1年保護者を対象にした給食試食会の充実 ・残食の状況傾向の分析及び保護者への紹介 ・栄養教諭を積極的に活用した食育指導の実施 【基本的な生活習慣定着に向けた取組の充実】 ・「睡眠の質向上」を中心課題にした児童への指導 ・児童を対象にした「生活リズムチェック」の実施 ・保健学習及び保健指導の充実 ・保護者参加型「情報モラル指導」の実施 ・学校医、学校薬剤師、学校歯科医を活用した保健指導実施 【体育科授業及び体育の行事の改善】 ・教職員向け体育実技研修の実施 ・龍王なわとびチャレンジの実施 ・ラダーや遊具を活用した体育授業の充実 ・児童会活動と関連させた休憩時間や放課後の外遊び・運動 ・外部指導者を積極的に活動した「運動指導」の実施
					・児童アンケート「給食の時間が楽しい」 「給食を残さず食べている」	・肯定的評価: 80%以上	肯定的評価 91.4%	肯定的評価 85.4%	106%	3	・「自分で決めた量は残さず食べる」を意識できている児童が増えており、肯定的評価が高かったが、増減の量に個人差があり、残食率の減少につながっていない。	B	「自分で決めた量は残さず食べる」を意識できている児童が増えており、肯定的評価が高かったが、増減の量に個人差があり、残食率の減少につながっていない。	
			体力の向上	・外遊びの励行 ・固定遊具等を活用した体育授業の工夫 ・体育的行事の充実	・新体力テスト課題種目(50M走)結果	・全国平均値以上の学年 67%以上	50%	男子 100% 女子 83%	男子 149% 女子 124%	4	・男子は全学年、女子は3年生を除いて目標を達成することができていた。日常的に身体を動かすきっかけを作ること、外遊びの増加も見られた。	B	小学生児童の場合、発育とともに50M走のタイムが良くなる傾向があるが、望ましい走り方を身に付けさせたり、肥満防止に結び付けたりする等、体力向上と健康増進の両面を進める事を念頭に置く事が重要である。外遊びの取組、授業改善の取組、食育の取組の成果としての走り・躍進力向上ににたわり続けてほしいと思う。	
働き方改革の推進	4	業務改善の推進	児童と向き合う時間の確保	・学校行事等の精選 ・ネクスト主任層の育成と組織体制強化 ・教職員働きがい意識向上 ・勤務時間外在校時間の軽減	・教職員アンケート「働きがい意識向上」に資する取組状況	肯定的評価: 80%以上	肯定的評価 78%	96.2%	120.1%	4	・業務改善について、「働きがいの」視点に重きを置くことにより、「チーム龍王」への参画意識や貢献意識を高めることができた。半面、肯定的評価の中でも5段階中3を記している教職員が全体の65.4%の割合になっている。また、組織内において自身の働き甲斐に繋がる学校業務が明確に記されている教職員に5段階中4のようその役割や見え、改めて年度当初における業務目標の明確化を図ることの大切さが実感できた。	A	ミドルリーダー層・若手層に対する人材育成の取組は大きな成果を上げられてきたと考える。中堅教諭層の人材育成については、若手層育への意識を持たせることにより促進される。学年部や各部会において、どのような役割を与えることが出来るか組織編成の段階から意識を高めることが大切である。	【年齢層に応じた人材育成】 ・学年主任会の定期開催 ・ミドルリーダー層を随時参加とした1～5年目対象にした「新芽の会」の定期開催 【研修受講奨励】 ・広島県研修システムの有効活用 ・業績評価面談等での積極的な受講奨励 ・業績評価自己評価における「働きやすさ」と「働きがい」の追究

※目標の精選と重点化を行い、重点の項に「1」「2」「3」で表示する。

■自己評価
4…目標を上回って達成
2…目標をやや下回って達成
3…目標どおり達成
1…目標をかなり下回って達成

■学校関係者評価
A…とても適切である
C…あまり適切でない
B…概ね適切である
D…全く適切でない